はじめに

議員になって、長くて短い8年間

私の地元、東京6区を歩いていると、
「ずいぶん前にNHKに出ていましたよね」
とよくいわれます。
「はい。8年前までNHKにいました。
8年経つと、ずいぶん前なのですね……」
と笑いながら、
それをきっかけに話をすることが、
しばしばあります。
参議院の全国比例の議員として5年、
そして、衆議院に移って3年になります。

衆議院東京都第6区補欠選挙で当選、
参議院から衆議院へ。(2003年4月)

なぜ、議員に？

8年前の１９９８年春から夏にかけて、私の生活は激変しました。アナウンサーとして18年、解説委員として8年、合わせて26年仕事をしてきたＮＨＫに別れを告げて、政治の世界に飛びこんだからです。

女性アナウンサーとして初めて担当した国会中継。中継席は本会議場の2階にあります。そこから下を見ると、〝ドブネズミ色〟の人、人、人。男性には申し訳ありませんが、20年近く前、男性のスーツといえば、ダークなものばかりでした。男女雇用機会均等法ができて、女性も男性と同様に社会で働ける環境整備に力が入れられていたときに、永田町の政治の世界だけは別物という感じでした。「先生」と呼ばれて、ふんぞり返っているオジサンたちに政治をまかせておいていいのか。これでは、普通に暮らしている人たちの声は政治に反映されない……。この想いが、私の原動力となりました。解説委員として、ＮＨＫで、ようやくやりたいことができるようになった時期でしたが、私は政治を選びました。

幸い、長年、テレビで全国に顔を知っていただいていたので、それまでにもひとつの政党を除いて、多くの党から議員にならないかとお誘いを受けていました。そんな中で私の背中を押したのは、皮肉にも自民党からの要請でした。１９９８年7月の参議院選挙に出てほしいと、自民党の橋本龍太郎さんと村上正邦さんの意を受けた人から、強力に働きかけがあったのです。しかし、私の解説を聞いていたら与党自民党から誘いがくるはずがない。それでも私を望むのは、当時自民党が過半数割れをしていた参議院で、何が何でも、なりふりかまわず、過半数をと考えている証拠でしょう。そこに組み込まれるわけにはいきません。また私には、国会には多様な意見を反映することが必要だという、強い信念があります。これらのことが、私の闘争心に火をつけました。友人であった民主党議員の部屋で、鳩山由紀夫さんと会い、その頃は党が名簿の順位をつけていた比例区の目玉に、ということで、3日間で決断してＮＨＫを辞め、4日目から選挙活動をしていました。

参議院から衆議院へ

解散の心配がなく、一定期間じっくりと仕事ができる参議院から、任期の6年を待たずに5年で衆議院に移ったのは、２００２年の秋に、石井紘基衆議院議員が、自宅前で暴漢に刺されて亡くなったためでした。私と石井さんとは、同じ成城学園の卒業生。また、世田谷に長年住んでいたことなど共通点がありました。そして、やはり成城学園の同窓生である羽田孜さんから補欠選挙立候補の要請を受けたのが、告示の1ヶ月前。私が3日で決断してＮＨＫを辞めて参議院議員になったことを知っている羽田さんは、この決断も3日間でと私に迫りました。補欠選挙というのは、全国で数ヶ所のみのため、与党は人手も財

力も10倍近くを投入してきます。野党はなかなか勝てません。当時の補選の数年間のデータも、加藤紘一さんが辞めたあとの補選で自民党が候補者を出さなかったときに民主党が勝ったのが、唯一の例でした。けれども私は、3日も待たず1日で立候補する決断をしました。運動期間は短かったのですが、石井紘基さんのご遺族や、彼が育んだ民主支持層、その他多くのみなさんのお力をいただいて、自民党の元金融庁長官、越智通雄さんに勝利。2003年4月に衆議院議員になりました。世田谷の北側3分の2を占める東京6区が、私の地元となったのです。

衆議院と参議院、どこがちがう?

衆議院と参議院のちがいは、いろいろあります。それぞれ独自性を大事にしているといいますが、そう意地をはらなくても、と思う部分もあります。

◇まず、議員の数がちがいます。衆議院議員は480人（小選挙区300人、比例区180人）。参議院は242人（選挙区146人、比例区96人）。参議院が衆議院の半分というのは、以前の貴族院のなごりなのでしょう。

◇任期もちがいます。衆議院議員は、任期満了は4年ですが、解散があるので平均の任期は3年2ヶ月といわれています。参議院議員の任期は6年で、解散はないので一定しています。そして、半数が3年で入れ替わるので、3年ごとの7月に参議院選挙があります。1回の選挙で選ばれる議員は、全体の半数の121人です。衆議院は〝常在戦場〟といわれますが、これは解散がいつあるかわからないからで、任期が一定している参議院とは大きなちがいといえます。

◇記名でない普通の投票のとき、参議院は参議院改革によって押しボタンにしたので、ボタンを押し、瞬時に議場正面の電光掲示板に賛否の数が出ます。ですから、その法案に誰が賛成か反対かが記録にも残ります。一方、衆議院は、全会一致のときは着席のまま「異議なし」と言って採決します。賛否が分かれる法案の場合は、賛成者は起立し、反対者は座ったままでいます。ほとんどの法案は、会派ごとに賛否を決め、党議拘束がかかっているので、多数を占める与党が賛成のときには「起立多数。よって本法案は可決すべきものと決しました。」となるのですが、実際に何人が起立しているかを数えるとなると、バードウォッチングで、素早く鳥の数を数える人に来てもらって、紅白歌合戦のように瞬時に数えてもらわなければわかりません。この「いいかげん」さが、いつ選挙があるかわからない衆議院には必要なのか、押しボタン方式の導入が議論になっても、いつも見送られているそうです。「いいかげん」もアナウンサー用語で平板に読むと、「きちんとしていない、なげやり」ということになってしまいますが、頭高かのアクセントといって最初の字にア

クセントをおいた「いいかげん」は、「ちょうどいい具合」という意味になります。私は、参議院と衆議院の両方を体験していますが、後者の「いいかげん」が、居心地よくなりつつあります。

◇予算については、衆議院が決定権をもっていて、衆議院で可決し、参議院で否決しても、再び衆議院で3分の2以上で可決すれば成立します。

◇法案の審議も、「参議院先議」といって、限られた日程の中で多くの法案を審議するために、先に参議院で審議をする法案も、最近は増えてきてはいますが、全体の4分の1位です。多くの法案は、衆議院で先に審議します。ひとつの院で、法案をそのまま、あるいは一部修正して可決し、もうひとつの院で異なった結果になると、先に審議した院に戻さなければなりません。時間がかかるので、そういうケースはほとんどなく、先に審議した院の決定によることになります。後で審議をする院は、審議の中で確認する答弁をよりしっかりとって議事録に残し、附帯決議は、それぞれの院で異なってよいので、これからの検討事項や政府の対応等について、より充実した附帯決議をつける努力をすることになります。

◇よく、「参議院は衆議院のカーボンコピーだからいらない、一院制にすべき」という議論がありますが、私は、そうは思いません。現在は、選挙制度も役割も似すぎていますが、

それぞれの役割を明確にして、二院あったほうがいいと考えています。参議院は、任期が6年と一定し、その間解散もないので、超党派で議員立法を作るなど、腰をすえて政策を作るのには向いています。例えば、私が5年間参議院で議員をしている間に、超党派で3年かけて作った「DV（配偶者からの暴力）防止法」も、参議院独自の「調査会」を舞台に、いちからすべて議員で作り上げました。調査会は、3年間テーマをひとつに絞り、超党派で取り組むことができる仕組みです。DV防止法の効果については後に記しますが、こうした人権にかかわる法案などを、落ち着いて作ることができる特色が参議院にはあります。一方、衆議院議員は、地元の選挙区の方々と触れ合う機会がより多く、アグレッシィブ（積極的）に動く傾向が強いと思います。

衆議院、参議院がそれぞれの持ち味を出して補完しあっていくためには、選挙制度を変える必要があります。例えば、私は、衆議院は全部小選挙区選出にして、参議院は全部比例区にする、という位、はっきりした方がよいのではないかと思っています。一定の割合の女性が議員になっているヨーロッパの国などは、比例代表選挙だからできているということもあります。参議院を比例にして、クォータ制（割当制）を導入し、戦後60年以上たっても衆参あわせて、女性議員が10・5％しかいないという比率を上げることができるようにし、さまざまなマイノリティー（少数者）の意見も反映できるようにしたらよいので

はないかと私は考えています。

そして、閣僚は衆議院だけから出して、予算は衆議院で決め、行政監視や決算は参議院で行なうと、役割を明確に分担してはどうでしょうか。一院だと、そのときの人気投票のような形で政権が選ばれかねません。現に、小泉劇場といわれ、自民党が圧勝した２００５年秋の選挙では、投開票日の翌日には、およそ7割の人が自民党を勝たせすぎたと思っているという世論調査が出ていました。二院でチェックしていく機能がいるのかいらないのか、この議論は、憲法改正の中で、時間をかけて国民全体でしっかり議論すべきテーマのひとつだと考えています。

国会議員の1日

私の暮らす喜多見は世田谷区の西の端。国会まではドアトゥードアで1時間ほどかかります。国会開会中は、たいてい朝の8時から会議がありますので、家を出るのは6時45分頃。小田急線の喜多見駅まで、シンボルカラーの黄色い自転車で行き、駐輪場に止めて、小田急線と千代田線を乗り継いで通勤しています。大きな荷物をかついで、トコトコ歩いていくので、参議院ではようやく認知されていたのですが、衆議院にかわってからしばらくの間は、衛視さんに「身分証明書は？」といわれました。このように、普通に通勤する議員がいるとは思わなかったようです。8時の会議がない日には、ストレス解消と、頭と身体の血のめぐりをよくするために、近くの公園まで30分ほど朝のウォーキングをしています。小田急の操車場の上に作られた公園ですが、季節の花が咲き、周囲には足によいウッドチップを敷いた歩道があります。ウォーキングシューズをしっかりとはき、手足を大きく動かして歩きます。見まわりをしているシルバー・ボランティアのみなさんと会話をするのも、地元の皆さんの声をきく大切なチャンスです。

国会では、本会議、委員会のほかに、党の部門会議や、テーマごとのプロジェクトチーム（ＰＴ）の会議、超党派の議連の会や勉強会などが連日行なわれています。現在、民主党の次の内閣の、子ども政策／男女共同参画／人権・消費者担当大臣をしているので、次の内閣の閣議にも週に1回出席します。委員会は、内閣委員委員会と青少年問題特別委員会に所属していますが、青少年問題特別委員会では筆頭理事をつとめているので、国対（国会対策委員会）との合同会議もあります。筆頭理事の仕事は、知力、体力、そして交渉力が必要とされます。特に、野党である民主党が実を取るためには、喧嘩上手であることも大切な条件。時には一歩も引かずに闘います。さらに、次の内閣で担当している3つの分野の調査会をそれぞれ主催し、子どもの安全合同会議や、部門を横断したＰＴを共催もしています。

会議だけでなく、もちろん法案作りもしています。２００６年の通常国会では、子どもに関しては「子ども手当法案」「小児医療法案」を政府案への対案として提出し、「認定子ども園（幼保一体化）法案」の修正案を提出しました。男女共同参画の部門では、「男女雇用機会均等法」の修正案を提出。また、人権・消費者問題に関しては、消費者団体訴訟制度を創設する「消費者契約法改正案」の対案を提出し、消費者の側に立った修正を実現しました。

とにかく、毎日が全力疾走。息つく暇もありません。昼は、会議のとき以外は議員会館の食堂で急いで食べたりもしますが、地下2階のパン屋さんでパンを買ってきて、5分で食べてとび出すというのが最も多いパターン。２００２年に、参議院でのことを書いた『私の政治の歩き方』の頃と変わったのは、衆議院会館では、できたてのおいしいサンドイッチが手に入るということでしょうか。これには助かっています。

さて夕方は、委員会や会議が終ったあと支持者や組織の会合などがあり、夜9時頃から議員同士が集まる会議が始まることもあります。帰れる日は、家で遅めの夕食を作ります。ＮＨＫで仕事をしながら、3人の男の子の子育てをしてきました。長男は30歳で独立し、今年32歳になります。私の秘書をしている29歳の次男も最近独立し、今は25歳の三男と一緒に暮らしています。夫は？　といわれそうなのでつけ加えますと、１９９４年に再婚したパートナーとは、別姓・別居・別会計です。

深夜、ホームページ（http://www.komiyama-yoko.gr.jp/）の日誌を更新し、メールの返事を書いたり、時には原稿を送ったりして、就寝は、午前1時頃。2時近くになることもあります。

２００６年4月26日の私の1日です。このような日々が国会開会中は続きます。

8：00～9：00　リプロ（女性の健康）勉強会
9：00～9：50　厚生労働省から「認定子ども園」法案のレクチャー（説明）
10：00～10：40　取材を受ける（禁煙推進議員連盟について）
10：45～11：00　来客（新潟から「男女雇用機会均等法」の行動で来たＮＧＯのみなさん）
11：05～11：50　世界連邦議員懇談会総会
12：40～13：00　代議士会
13：00～13：25　本会議
13：35～13：50　「男女雇用機会均等法改正」で座り込みをしている各地の連合のみなさんを激励
14：00～14：30　「消費者契約法改正」審議の参考人と打合せ、質問作成

15：30～16：00　臓器移植勉強会
16：00～16：30　子ども政策・文部科学・厚生労働合同会議（「認定子ども園」について）
17：00～17：20　各種団体の懇親会で挨拶
18：00～19：00　街頭演説（三軒茶屋）

地元が大好きです

国会の状況や政策を、なるべく時間を作って、ハンドマイクで地元の駅頭やスーパーの前などで話しています。そのときに、2週に1度発行している「プレス民主・ひまわりニュース」A4版を配ります。メディアは、すぐに実現する与党の政策は伝えますが、野党の政策はなかなか伝えてくれません。私もメディア出身だから事情はわかるのですが、そもそも政局に関する報道が多く、最近は特に劇場型政治の演出に一役買っている状態です。もちろんメディアは大切。ですから、民主党の政策を伝えるために、働きかけも工夫をしてはいます。しかし結局は、ミニコミで地域を歩いて伝えていくことが大事だと考え、地元の街頭演説はできるだけ多く行なっています。

地域の催し、盆踊りやお祭り、新年会などにも、なるべく参加するようにしています。これは、参議院の全国比例の議員の時との大きなちがいです。参議院議員のときは、全国をとびまわっていましたが、東京6区（世田谷区）の衆議院議員になってからは、地元で活動していることが、すぐに自分にはね返ってくるのです。大変ですがやりがいがあります。盆踊りも、事前の練習の場に参加して、しっかり踊れるようにして、各地で必ず一緒に踊り、30分以上、できれば1時間位はいるようにしています。ピークの週末には、10ヶ所以上で盆踊りが行なわれていますが、5分、10分顔を出すだけというのではなく、秘書と手分けをして、私は行った所で、なるべく多くのみなさんとふれ合うようにしています。新年会も同じです。商店街もなるべく歩き、一般の家庭や集会所でのタウンミーティングなども多くと思っていますが、限られた時間の中のやりくりになります。でも、私はもともと人と会い会話をすることが好きですので、地元をまめに歩くことは苦になりません。「小宮山さん！」「洋子さん！」と声をかけられると元気が湧いてきます。

地元、世田谷区太子堂八幡のお祭りに参加し、神輿を担ぐ（2005年10月9日）

そうそう。参議院議員になったときから続けている「先生と呼んだら罰金１００円」は今も継続しています。「先生」と呼ばれてふんぞり返る議員ではだめ、ということが議員になった理由のひとつだからです。議員会館の部屋に入ると、「先生と呼ばないで」と大きく書かれたポスターが目に飛び込んでくるはずです。でも、ただ駄目です！　では、そんなことに目くじら立てなくても、といわれてしまうので、議員会館の部屋には罰金貯金箱、バッグの中には罰金財布をもって、遊び心ももちながら、呼ばないでとお願いしているわけです。「小宮山さん」「洋子さん」か、「小宮山議員」。委員会の席でも徹底します。最初に年間通して行なった１９９９年は2万２５４６円でした。直近の２００５年は９７２１円ですから、だいぶ徹底してきたということでしょうか。この罰金は、年末にユニセフに募金しています。１００円で、途上国の子ども3人に予防接種ができます。

民主党はチルドレン・ファースト

民主党では、２００３年から、民主党が政権をとったら、みなさんの税金を、ムダなく、このように使うという、民主党の予算案を作って提示しています。

例えば、２００５年度の予算案では、「子ども＝子育て」「教育」「財政健全化」を最重点項目としています。特に「子ども＝子育て」については、総額３・６兆円の「子ども手当」を創設すると共に、将来世代に負担を押しつけないという観点から、国債発行額を徹底的に絞り込んでいます。そして、政府案に含まれる多くのムダ・不要不急な事業への歳出を大胆に見直し、約16兆円の歳出を削減しています。岡田克也代表のときのこの年は、特に「子ども＝子育て」「教育」に重点的に予算が配分され、「子ども手当」創設のほか、「出産時助成金」の創設、医療負担軽減、学童保育拡充、30人学級推進などの財源を確保し、民主党の子ども関係予算額は、政府案に比べて４・２倍の４・５兆としました。このほか、地方への大胆な税財源の委譲、政府案の税源委譲１・７兆に対して民主党案では５・５兆、一括交付金化０・３兆の政府案に対して民主党案では12・５兆と、大きく地方主権にシフトする民主党の特色を出したものになっています。

２００６年度の予算案では、政府案が、一般会計約80兆円の他に水面下に31の不透明な特別会計があるのに対して、お金の流れをすべてオープンにして国会で議論する、「予算の見える化」を特徴としています。民主党案では、地方への税源委譲を行ない、税収等はモノから人への投資に切りかえて使うようになっています。民主党の「見える予算」では、

▽「安全・安心」が見える10兆円として、〝モノから人へ、とくに子へ〟。

――アスベスト総合対策・学校安全費・奨学金貸与・ニート支援・基礎年金国庫負担率2分の1・子ども手当などにあてています。

▽「地域」が見える20兆円として、〝税源委譲＋一括交付金創設〟。
——税源委譲5・5兆円、一括交付金12・7兆円の制度導入・緑のダム事業・中小企業支援など、地域の活性化に向けた投資を盛り込んでいます。
▽「未来」が見える30兆円として、〝子・孫に借金をつけ回さない〟。
——特別会計をゼロベースで見直して、すべてのムダをなくすとともに、国債残高を30兆円縮小することとしています。

早く政権をとって、ほんものの予算案として、税金をムダなく使い、暮らしの安心や未来の子どもたちに投資する政治を実現したいものです。私は、できることがあるなら必ずやりとげる。「今」をせいいっぱい、大事にしていきたいと考えています。特に、２００４年の1月に、青信号の横断歩道を歩いているときに、左折してきたライトバンにはねられ、6メートルも飛ばされて、生命がなくなっても不思議ではないという事故にあってから、「生かされている」間に、せいいっぱい仕事をしたいという想いを強くしました。議員としての仕事の場を与えていただいているのですから、ひとりひとりの暮しの安心をつくるために、特に子どもたちの未来に責任をもつために、私ができることを、せいいっぱいやっていきたいと考えています。議員になってよかったと心から思っていますから。